

第67号

昭和55年5月25日

内容

- 座談会「私の仏教観」..... 1
- 第108回大学共同セミナー..... 3
- 第7回国際学生セミナー..... 6
- 54年度大学共同セミナー白書..... 8
- 第4回共同セミナー委員会..... 9
- 寄付金報告..... 9 寄贈図書..... 9
- 千人会..... 10
- 第42回理事会・第25回評議員会..... 11
- 事業部だより..... 12
- 館長日記から..... 13

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

<所在地>

東京都八王子市下柚木
(●192-03)
電話 0426-76-8511~3
振替口座 東京5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス
企画室

座談会

私の仏教観

京都大学名誉教授 西谷啓治
東京大学名誉教授 山内恭彦
(司会)筑波大学教授 三枝充憲

1月13日、第107回大学共同セミナー「仏教と人生」の最終日に、三先生によるゲスト座談会「私の仏教観」がセミナー参加者のほか来賓諸氏との問答も交じえ、約一時間半にわたりに行われたが、ここにその一部を要約した。



西谷 私は専門が西洋哲学で、仏教については全くの素人だが、素人なりに長い間、仏教に関心をもってきた。それにはいろいろな要素があり、生家が浄土真宗の信者だったこと、中学・高校時代に夏目漱石が非常に好きで、それを通して禅などに触れたこと、学生のころ人生問題からいろいろな仏教書を読みあさったりしたことなどがあげられようが、もっと強く私を仏教に近づけたものにはつぎのような体験がある。

西洋の哲学書も読んでいくうちに理解することも、教えることもできるようになる。しかしそれらは知識として頭ではわかって、どうしても、それが身につかないという感じが絶えずしていた。たとえば、いけば、蠅などが外をめぐりながらガラス窓や障子にぶつかるといっても、いくらか見えてはいるけれども、何か一枚、勉強して得たものと自分自身との間に、何かしらささざるもの、目に見えない一種の境目があって、どうしても自分のものにならないような感

じがする。相当悩んだ末、住いの近くの古い禅寺にいき、少しずつ参禅するようになり、坐禅をやっているうちに、いくらかずつ自分の身体と結びつくようになった。それ以来、気が楽になり、以前のような不安感がとれていったように思う。

それは他の宗教の場合でも同じようなことがおそらく出来るだろうと思われるが、ただ私は専門が哲学ということもあって、やはり仏教がそういうことを割合、可能にする性質をもっているのではないかという感じがする。

キリスト教の場合には、神は世界の創造主とする一神論の立場であると同時に、広い意味で人格的(パーソナル)な神である。これに対して仏教には仏さまという一種のパーソナルな性格も帯びてはいるが、汎神論的(パンテイステイク)というか、あらゆるものが仏のあらわれだ、あらゆる思想がある。これを法身仏(ほっしんぶつ)ということばで、仏の法身(法性(ほっしょう))のあらわれとがう面、同じ西洋哲学でもギリシア哲学のある一面と相通するも

のがあるように思う。
お釈迦様が亡くなられる時に、私を崇拜の対象にしてはいけな、各人が自分自身を灯明にせよ、といわれた。また万物の中に含まれている「法」、この「法」を灯明にせよと遺言されたという有名な話がある。これはキリスト教と性格がちがいが、哲学と割に結びつきやすいところと思う。

しかし同時にさっきいった人格性というか、パーソナルな仏という面ももちろん重要で、そういう形で信仰の対象にしている一面は絶えずある。そういう問題は残るけれども、仏教というものには日常の生活の中で生きる道を求めていくという時に、比較的自然な形で結びつきうる要素があるように思う。とくに禅においては「行」、トレーニング・プラクティスの面を非常に重んずる。これは非常に大切な面であり、宗教には一種のウェイ・オブ・リビングという面があるけれども、禅は日常生活の中で、自分をトレーニングする、人間として生きる道の「行」がある。

「行」を「行」くとすれば、それは自分を次第に内から道に沿って道を歩くという形で、自分が自分をトレーニングしていくということになるかと思う。それがやはり生きるに必要な面、考えるところと結びついて、実際に「行なう」ということであり、それがつねに仏教の根本にある。少なくとも私自身はそういう経過で仏教に近づき、いま仏教徒かと問われて、そうだとはいえるようになったように思う。



山内 私が物理学者でありながら宗教に関心をもつのは、別に不思議ではない。物理学と宗教とは全く守備範囲が違ふ。物理学というのは物質の性質を究めるという形而下の学問で、方法としては論理とか実験をつかう実証科学だ。ある前提を設けて、そこから推論していく。推論した結果を実験と対比して最初の前提が正しいかどうかをさぐる。その前提をうまく組み合わせて一つの理論をつくるというのが物理学であって、宗教とはそれが全く違ふ。「ひとりの人はひとつのことしかできない」というのではないとすれば、人間はいろいろなことを考え、いろいろなことを感ずるものであって、物理学的・自然科学的方法でものごとをすべて解決するわけでもないから、他のことに関心をもつことに不思議はない。物理学者が全部唯物論者で論理的なものかというとなんかとはならない。物理学者の私生活を見ればすぐわかる。

昔、自然科学があまり発達しないうちは宗教が自然科学のある部分のうちをうけた時代があった、哲学の方でいうと自然哲学といったものがた。ただし、ここには実証性が欠けていた。勝手な前提でいろいろな推論をしていき、なかにはまぐれ当たりもあり、今でも通用することがたくさんあるけれども、これは科学とはいえない。たとえば仏教でも須弥山(しゅみせん)説という宇宙論のようなものがあるが、もちろん今は通用しな

い。西方に浄土があるというけれども、地球は丸いから西方は場所ごとに違い、宇宙のどこなのか、全くわからない。こうしてかつての自然哲学的、神学的考察はもう今日の宗教には要らない部分になつていく。

仏教とひと口にいても、いろいろな発展の経過があり、いろいろな考え方があって、これを全部お釈迦様が説いたとすれば、お釈迦様はたいへん矛盾に満ちた人ということになる。事實はお釈迦様ははじめて説いたものをいろいろな人が発展させ、そのうちのある面を発展させていったのであって、いろいろな宗派もできた。だが、そもそもお釈迦様は私が先に話したことに非常に近い考え方をもっていたと思われる。自然科学と宗教とは別のことをするので、一向矛盾するものではなく、人間の全人格の統一ということには支障は生じないと感じる。

なぜ私が仏教に興味をもつようになったかといえば、やはり日本に育ったからではないかと思う。それは日本語をしゃべると同じようなことだ。私は元来ヒューマニスティックでない人間で、人間に対してよりも自然の方に親近感をもつ。そこで、若いころ人間社会で生きるというところにかなり悩みを感じていた。そういう時、何かの因縁で『法句経』を読んだ。「経」とあるけれども元来ダンマパダ(真理のことば)といい、原文は詩で、非常にきれいな文が連ねてある。そこには若い頃のいろいろな苦しみ、悩みに対する指針として与えられるものが多かった。仏教には西洋の見地から見ると、

ペンシステイクかつニヒリスティックな面が非常にあるように思う。お釈迦様ははじめて出家されたのは人生の苦を解決するためだったし、そこにはあまり楽観的な立場は見られない。私にもそういう傾向があって、むしろ自然に逃避したいようなところが多分にあつたと思う。たまたま昨年アインシュタインの百年祭というところで、語録のようなものを読んだら、かれの科学にこそさす動機の一つは世の中のわずらわしさから離れて心の平静を得るためだったという。これはむしろ出家遁世のころさした。科学研究のこんな動機もあり得るのかと、私もいささか安心した。私の場合もそれに近いと思われる。

自然が好きで、山ももちろん好きだ。山を崇拜するということは各国にあるだろうが、日本ではそれが非常につよい。日本の名山の初登攀者はたいいお坊さんだ。そもそも日本でいちばんはじめに民衆に入つていった宗教は山岳宗教で、それが今まで伝統的に残つていて、富士山や御岳山には講中というものがあつた。これは仏教と神道の混合のようなものだ。たとえば西行についてみると、仏教の教義を説いた歌は技巧的でおもしろくないが、山をうたった歌は実に宗教的情感にあふれていて気が持たない。ともかく自然、たとい朝日に輝く高い山に、非常に崇高な感じをもつ。ひとこと、仏教、宗教に悪口と注文をいえば、それは感情とか情緒とかに訴えるものなのだから、経典、聖典の文章を文学的センスをもつて翻訳しては

質問 死という問題をどうとらえておられるか。それが若年、中年、老年とご自分の年齢の変化によってどう変わつてこられたか、お教え願いたい。

山内 私は死というのは自然現象と思つているから、いとうべきものだとはいふべきではない。ただ死に対する生物学的な恐怖はあるから、身に危険が迫ればもちろん避ける。年をとつてくると、死というものもあまりこわいものでも、いとうべきものでもなくなる。生物というものは、そういうふうにならうまく出来ているのではないか。西谷 そこは人によつて非常にちがうのではないか。自然科学者には多いようだ。しかし一般人の人が死は死は個人としては非常に大きな問題と思う。

山内 つまり自己の生存ということにどれだけの価値をおくかということになる。

西谷 一般の人は生きていてそのこと自体が絶対的な価値として感じているのではないか。そういう絶対的価値を否定する、つまり生きていくことへの執着から離れるのに、相対化して考えるという余裕を与える上で、たとえば仰るような科学の態度が何か意味をもつのかも知れない。つまり世を捨てて執着をなくしてというのとは一種の死への方向だという。ひるがえつて死への方向がよりよく生きるという意味をもつてくることはある。年齢をとつて死が近づいてくる、それを受けとる態度として、そこには積極的な意味もあるように思う。それとは別に仏教でいわれる大死、大きく死ぬという

場合、生と死という相対的な立場ではなく、今までの生とはちがう大きな転換があるはずで、生きながら死ぬというか、死ぬことによつて本当の生を生きるとかという言ひがある。これはキリスト教にもあるし、宗教に共通した方向ではないか。哲学というのは死を習うことだということもできる。



三枝 先ほど山内先生がニヒリスティックな立場というようになことをいわれたが、西谷先生にも「ニヒリズム」という名著があつて、まさしくここに、ニヒリズムと同時にニヒリズムの克服というか、ニヒリズムをポジティブに生の中で超えていく、そういう命題を背負つてお二人の先生は七〇年、八〇年を歩んでこられた。その生涯の経験が今日のお言葉になつたかと思ふ。現実には絶えず煩惱があり、煩惱についての迷ひがあり、そういうものについての迷ひがある。そのさなかに一つ一つ脱却し、一つ一つ道をひらく、西谷先生のいわれるトレーニングしていただく。ただしそこには定まった道などなく、おのおのがおのの道を探り歩き登らねばならない。そこに死もあり生もあり人間の営みがある。仏教の術語をつかう、つかわないにかかわらず、われわれは今後ともこの道を進んでいきたい。お二人のお話の印象をそんなふう

若い諸君には燦然たる将来が輝いていると同時に、日常絶えず屈折があり挫折があり行きつまずきがある。そのなかで西谷先生のお言葉では大死を自分に宣告し新たな道を生きて行く。そこには山内先生のいわれたとおりの高い山がそびえている。

本日の催しは飯田館長の古稀記念、祝賀ということであり、仏教の言葉でいう「縁」が熟して、最も尊敬するお二人の先生からまことに意義深いお話をうかがい、また皆さんと一緒に考え、討論した。この貴重な体験を、飯田館長への最大の贈りものとし、また若い皆さんのひとりひとりの芽となり肉となることを切望する。

(文責編集者)

純白の雪景色を背景にしての「新年の集い」で、感銘深いご講話を下された西谷先生、山内先生のお姿、古稀を迎えられ深い洞察の瞳、暖かくして、なお青年の雰囲気をお姿が、その時奏でられた四重奏の神秘的な音色と共鳴しあひ一つとけて、私の心に暖かい血となり流れ込みました。

先生の清らかな精神の鐘の音が、これから世に出る若者たちに、若者を世に送り出す先生方に、あまねく響きわたるつづきますように、心より祈らせていただきます。

古稀を迎えられた飯田先生に捧ぐ
美しく生きる魂(こころ)の結晶が
ふりふるつもる初雪となる

伊藤月美
(第10回共同セミナー参加者)

第108回大学共同セミナー

主題——イスラムの世界

——その文明の現代的意義——

期日——昭和55年3月12～14日

Ⅰ 全体講義

世界史におけるイスラム

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語研究所助教授 三木 亘氏

Ⅱ イスラムの理念と現実

前イラン王立哲学アカデミー

教授 黒田壽郎氏

Ⅲ セクション演習

言語と文化—アラブを中心に

大阪外国語大学助教授 池田 修氏

イスラム教の世界観

東京大学助教授 中村廣治郎氏

イスラーム教徒の生活と文化

アラブ社会における調査研究

津田塾大学教授 片倉もとこ氏

イスラムの社会史—都市と農村と遊牧

お茶の水女子大学助教授

佐藤次高氏

国際関係と経済—社会開発

アジア経済研究所調査研究部長

中岡三益氏

東京外国語大学助手 藤田 進氏

民族と国家—民族主義・民族運動

東京大学助教授 板垣雄三氏

(運営委員)

△参加学生 104名(うち女子59名)

津田塾大(14)、東大(13)、慶大、早大(各6)、東外大、お茶の水大、聖心女大(各5)、岩手大、筑波大、一橋大、横浜国大、大阪外大、成蹊大、東女大、日女大(各3)、IC

U、上智大、明大、立教大(各2)、千葉大、都留文科大、国際商科大、青学大、実践女大、創価大、東海大、同志社大、アジア・アフリカ語学院(各1)、その他9 計28校

◇ イスラムの世界——待望のテーマの実現である。

共同セミナー委員会は、アンケートの中からこのテーマを選び、中東研究の第一人者であられる板垣委員に、運営委員を委嘱した。9月に入り、板垣氏と企画室の間で、セミナーの方向づけを行ない、副題を「その文明の現代的意義」と設定した。セミナーの構成や講師陣の人選はすべて板垣構想によるものであり、別記のように第一線級の研究者をお招きして開催の運びとなった。

プログラムの、まず二つの全体講義から開始された。最初に、三木亘氏によって、時空のなかにおける人びとのくらしの形態の解明という、歴史生態学の視点から世界史を組立てた「お茶」という試みがなされた。氏によれば、その作業のポイントとなるのがイスラムである。イスラム圏には自然の生態系によって、農民、牧畜民、山岳民、海上民、都市民に大別される生活類型が見られる。それぞれの生活類型は独特のカルチャーを有し、独立の価値

観を持つから、相互に異質的であるが、同時に生活物質の交換や社会的機能の面で結びついて、モザイクのように入り組んだ世界を構成していることを、導入部として話され、従来の世界史における歴史区分は、19世紀のヨーロッパ人がつくり出した歴史構成に基づくもので、そこには地理的な連続性が全く見られないこと、一つの文明をつくり出して栄えた地域は次の段階で順調に発展せず、むしろある段階の文明の辺境に新しいエネルギーが出て次の文明を背負うことを、歴史地図を通して明らかにされた。近代・現代の中東の直接の過去となるのはオスマン帝国であり、異質な生活体系の共存を国家システムとして表現したという点で、この帝国の存在は極めて重要であること、また、異民族や異教徒の侵略によって、アラブを中心としたイスラム教徒が、国家や体制から疎外されることになる11～15世紀とは、くらしのレベルにイスラム教が結合してイスラム社会を形成する時代であり、疎外が逆にイスラムにバイタリティを持たせることになったのではないかと、現代のイスラム理解の糸口を示された。

参加者の多くは、「固定化された歴史観を捨て、新しい視点から世界史を見ることができた」と、その感動をアンケートに記している。つづいて黒田壽郎氏は、別掲のように、三大啓示宗教の一つであるイスラムの特質を、イスラムに愛情を寄せた人間味あふれる語り口で話された。

夕食後は、メッカ巡礼のドキュメンタリー・フィルムが、イスラミック・センター・ジャパンのご好意で上映され、参加者はアラブの風土や服装などから、視覚によって信仰の生々しさを感じとることができたようであった。

今回のセミナーのハイライトは何となく二日目午後から夕食会にかけてのプログラムであったろう。パネルディスカッションでは、各々の指導教授によって、アラブとの出会いが半ば告白的に語られ、アラブ首長国連邦全権大使、ロマヒー博士をお迎えしての交歓パーティに移った。博士は別掲のように、およそ一五分のスピーチをされ、食堂の馬場チーフがこの夜のために腕をふるった本格的なアラビア料理が供されるに及んで、参加者の興奮もピークに達した。博士は、料理に最大限の讃辞を残し、学生との交流の一時を楽しまれて、多摩の丘をあとにされた。ちなみに、アラビア料理を作るに当たり、タマリ京子夫人にご助言を仰いだことを記し、ご協力に謝したい。

最終日の全体集會では、各セクションのレポーターによる報告のあと、指導教授による講評が行なわれた。三日間、セクション演習を中心になされた討論と共同生活を、閉会に当たって板垣氏が述べられたことばの中に要約できるだろう。

「これまでイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

◇ 現今の「イスラム・ブーム」を反映して一〇四名の参加者があり、イスラム圏で奉仕活動や伝道活動に従事するための予備知識を得るため、という目的の明確な社会人が目立ったのも今回の特色であった。54年度の共同セミナー参加者が八〇名をわっていたことを考えると、時宜を得たテーマの設定は、確かに共同セミナーの企画に重要な要素となることは事実であろう。しかし、セミナーの一月後、中村廣治郎氏は読売新聞文化欄に、「イスラム研究への反省」と題し、「イスラム・ブーム」の奥にある基礎的研究の層の薄さと専門研究者の養成の必要性を書かれ、今回のセミナーにも若干触れておられる。参加者の中から一人でも多くのイスラム研究者が育って欲しい。これが指導に当たられた先生方の切なる願いであるように思われる。

◇

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

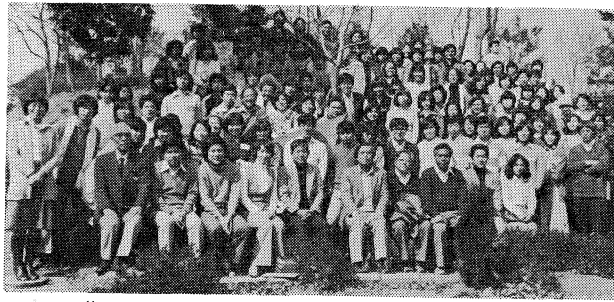
「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」

「これまでもイスラムに関わっていたか否かを問わず、これだけの討論がなされたことは、自分の中にあたたかみを感じた問題意識を参加者が持っていたからだろう。」



“イスラム大学”の出現——盛況の第108回大学共同セミナー

◆イスラームの理念と現実

前イラン王立哲学アカデミー教授

黒田壽郎

イスラーム研究の現状は、伝統が浅いばかりか、その方法論のほとんどを西欧に依存している。しかもある種の固定観念が、研究そのものの真価を損なってしまうことが多い。例えば、イスラームは低開発国の宗教であるとか、四人妻と貧乏人の子沢山の宗教といったことが平然と語られる。しかし、ギリシアの栄枯盛衰をもってギリシア哲学の価値を云々することができないのと同様に、光源（コーラン）そのものとレンズ（個々のムスリム）を通してスクリーンに投影された像（イ

スラーム世界の現状）をもって、これがイスラームだと断定することはできない。また、イスラームは7世紀からわずかに数世紀の間価値を有した宗教で、現在には適応しないといった類の学問的態度がヨーロッパで随所に見受けられる。他方ヘーデイス（ムハンマドの言行に関する伝承）には嘘があるとして無視され、預言者の研究にも全く引用されぬといった態度がつかぬかされている。だが聖書に記されたイエスの言行を無にしてそれを信じてきた人々の精神的行動様式、さらにはヨーロッパ・キリスト教について語れるであろうか。主として中東世界を舞台に人類は連の預言者の伝統を持っていた。イスラームは、周知のようにユダヤ教、キリスト教とともにこれに関連した姉妹啓示宗教である。アダムに始まって、実在に二万四千人もの預言者が連綿とつづき、神の啓示が時代に応じて下されたといわれている。非常に単純化すれば、アブラハムによって唯一神の宗教が確立し、モーゼの登場によって律法が加わって、ユダヤ教が生まれた。単に精神的に唯一の絶対者を崇めるだけでなく、同宗の者が協力し合って生活することが信者の努めである、という社会的なアスペクトがここで付与されたのである。いうまでもなくそれはユダヤ民族に啓示された選民宗教であったため、ユダヤ教の内部から福音は民族によらず総て

の人間に開かれていたことを説いたイエスが出現する。キリスト教は啓示宗教の一大進歩であった。しかし、イスラームの立場からすれば、十字架上のイエスは、神から特別に選ばれた者ではあるが、彼はあくまで人間であり、キリスト教の三位一体論は、イエスの周囲にいた人々が作り上げたものだと考えている。これが、イスラームとキリスト教との基本的な分岐点である。このことは信仰形態を見ると一層はつきりしてくる。キリスト教には神と平信徒を結ぶ縦軸に聖職者が入る。聖職者が洗礼を受ける瞬間、キリストになれるということは、信者の間に差別を生む。これに対してイスラームにはこのような差別的契機はない。アッラーは唯一であり、ムハンマドは御使であることを認め、コーランに書かれていることを守る誓いをたてれば誰でも信徒となることができる。そして一旦ムスリムとなった以上、彼らはイスラーム共同体の成員としてまったく同等の立場で連帯責任を負うことになる。キリスト教も旧約聖書を聖典の一つとしているから、当然、これを信徒同士を結ぶ基準としてという側面があるが、その究極の目的は個人の魂の救済であって、個人が共同体の命運にかかわるといって性格は希薄である。また、キリスト教は普遍的な愛を説いてはいるが、その社会的な発露の問題について明確な規定を持たない。イスラームでは出家は社会的責任の放棄を意味するという考えから、修道院制度がないことにも現われているように、その規定は明確である。

しかし、イスラームの持つ政教一致の性格は、現実の中で必ずしも理想的に具体化されていない。初期のカリフたちは宗教の長であり、政治の長でもあったが、次第に世俗化し腐敗していった。それでもイスラームを守ってきたのはイスラーム法であった。世俗化したスルターン（王侯）も統治にあたりイスラーム法を守る以外になく、イスラーム性は法によって守られた。このようにイスラームとは、政治でもあり得たし、法でもあり得た。そして法が取り去られる場合でも、民衆の間にそれが教える倫理が残された。それはまたイスラーム圏においては文化の核でもあった。外国の植民地政策下に置かれていたイスラーム諸国（中近東諸国）は、一九五〇～六〇年に政治的独立を成し遂げ、七〇年代には経済的自立性も持つようになった。八〇年代に向けて何かを予見するかのようになっていった。イスラーム革命は、このイスラームを樹立したものと比べてよいのではなからうか。

（第108回大学共同セミナーの全体講義（Ⅱ）より、文責・編集者）

◆参加学生の感想から

①……………店 田 廣 文

イスラームとアラブに多少のかわりを私が持ちはじめたから、既に一〇年以上の歳月が流れている。深くそれにコミットするでもなく、完全に断ち切るのでもなく、常にその周辺を徘徊してきたというのが実状であった。ちょうど私の関心の振子がアラブに向か

いはじめた時、共同セミナーの開催を知り、何はともあれ参加することに決めた。共同セミナーの全体の印象を一言でいえば、期待にたがわず刺激的であったといえよう。最初の全体講義では、今までのとりとめのない、私のイスラームのかかわり方がひとつの方向に纏められた。引き続いてのセッション演習を終えたあと、イスラーム都市の居住区の構造やモスクが住民間の交流に果たす役割、都市の発展、マドラサのこと、都市・農村間の人の移動のことなど諸々のことが、大雑把な形ではあるが連関した状態として把握された。今後は、私の専攻である社会学を道具として、これをさらに明確な図式につくりあげていくことで、イスラーム都市における「くらし」のありようを説明することが個人的課題である。ところで今回は各演習の主題がいずれも興味深いものであり、選択の際にひとつに決めかねた参加者も多かったと思う。先生を一人に固定せず、セッションごとに三人程度の先生方がそれぞれの専攻分野からみた主題についての演習を行なうという方法も考えられる。困難な面も多いが、全体テーマの総合的理解にも通じるものであり、今後テーマによっては実施を検討されたい。

セミナー終了後も種々の形で参加者間の交流がづづいていく。生活を共にしたという意味で「イスラーム共同体」を構成した我々ひとりひとりが、日本のイスラーム研究を一層発展させることに参加していくことを願うものである。

（早稲田大学大学院）

アラブがアラブでしかない者にとつて異文化との接触は「未知との遭遇」でしかなかろう。先頃のイラン革命以後、中洋では今までの「西洋」支配の行動パターンで考えては如何ともしがたい状況が続いている。石油による脅威という我々に危害の及びそうな事態に至らないと騒ごうとしないし、相手に興味を持つとうとしめない（ベトナム・アフリカについては状況は異なるが我々の対応は似たようなものだったろう）。ところが、私のように地方大学にいと、たとえ「未知との遭遇」を望んでもそのチャンスはなかなかない。そのような時、大学共同セミナー「イスラムの世界」に参加でき、新たな世界を見ることができた。

(岩手大学人文社会科学科3年)



S. ロマヒーフ氏

What is Islam?by Dr. Seif al-Wadi al-Rumeihi

Islam is not merely religious practices, it is a very comprehensive and complete system and way of life.

Let me first explain what Islam is. The arabic word "Islam" has different meanings. One meaning is derived from the word *Salām* which means peace. Another meaning is the submission to God through peace and worshipping. This second meaning is the best interpretation of the word "Islam".

There is something synonymous to, but, according to Islamic theology and teaching is higher in degree than Islam, which is called *Imām*. Islam, as I have said, is submission to God through peace and worshipping. It is the practice of Islam. *Imām*, though, is something deep in the heart; it is a belief in the one God who created mankind and the universe, and has made the system of the whole universe as it is now. This is what we call *Imām*, or faith, which is on a higher level than Islam.

Both Islam and *Imām* have pillars, or cornerstones. The pillars of Islam are fasting at *Ramadhān*; praying five times a day; confessing that one God created the universe, and that the prophet Mohammed is his messenger; and paying taxes to the government, which is called *Zakāt*.

The pillars of *Imām* mainly stress the belief, the faith in your heart. You have to believe in the oneness of God; in God's messengers, beginning from Abraham and Mohammed; in the Holy Books and in Judgement Day.

When I speak of the prophets, in my personal interpretation I include Buddha, Confucius and Hammurabi, because there is a statement in the Koran addressed to Mohammed, "we have told you the stories of some prophets, but some we did not tell you."

Let us then consider Islam as a religion. Unlike other religions, including Christianity, Islam does not separate the priesthood from the government. A Moslem, according to Islamic teaching, should be a man who understands the way of his religion and is a politician at the same time.

As for the structure of Islam, it is, as I stated in the beginning, a complete system of life. This system has both capitalistic and socialistic elements.

It is capitalistic in that it respects private prop-

erty. Stealing a man's land, money or possessions is as serious a crime as stealing his body. Both are major crimes according to Islam. Therefore, Islam respects property and values ownership.

On the other hand, Islam is socialistic in that there is a condition attached to private ownership. That is that a man's property is his only as long as he behaves properly and uses it well. If he does not meet this condition then the state may confiscate his property. The principle is that money and property belong to God, and that we human beings are only protectors or watchers over it, free to use it only as long as we use it well. Once we misuse it then God's property is taken by the state, which represents God on earth.

This simple explanation shows the capitalistic and socialistic elements of Islam. To me, as a Moslem, though, Islam is unique. It is neither capitalistic nor socialistic. Qadhafi explains this as the third theory, which is independent of capitalism and socialism.

Finally I would like to speak of relationships as an important element of Islam. Islamic teaching speaks of two systems of relationships: those between man and man, or state and state, and those between man and God. Relationships between man and God are ruled by the pillars of Islam I mentioned before: fasting for God, and so on. This is man's relationship with God, and this is tolerable. What is intolerable is the misuse or misunderstanding and ill-treatment of man by man.

The relationship between man and man has been stressed throughly by the prophet Mohammed. He said that religion is that kind of good relation.

Religion is advice. Religion is your smile at your friends. Religion is to look after the welfare of those who work for you. These are the elements of Islam which are the relationships between man and man.

Let me summarise this with the prophet Mohammed's last statement. He said, "Treat others the way you would like them to treat you."

This is Islam.

第7回国際学生セミナー

主題——文化接触と日本

——「相互依存」のなかで——

期日——昭和55年3月17日～19日

△全体講義▽

日本人の日本知らず—世界の日本の日本

上智大学教授 P・ミルワード氏
△セクション演習▽

A 東アジアと日本の近代化—その軌跡と接点

東京大学助教授 平野健一郎氏

B 東南アジアの価値体系と日本的価値観—伝統的日本文化の再評価

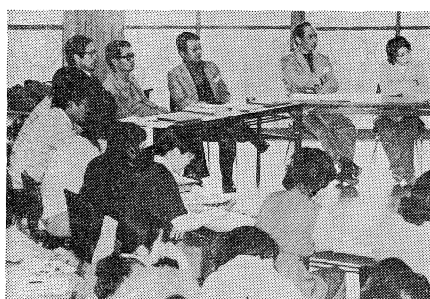
早稲田大学教授 菊地 靖氏

C アラブと日本人の距離—アラブとの文化接触をめぐる

津田塾大学教授 片倉もとこ氏

D ラテン・アメリカと日本—相互依存と相互理解

筑波大学助教授 中川文雄氏



右より片倉, 中川, 菊地, 広野, 平野の諸氏

E 日豪関係の新时代—経済関係から総合的關係へ

成蹊大学教授 広野良吉氏

△運営委員▽

東京外語大学教授 中嶋嶺雄氏 (委員長)

上智大学教授 三輪公忠氏

津田塾大学助教授 小倉充夫氏

東京大学教授 岡野行秀氏

早稲田大外事課長 山代昌希氏

△参加学生▽126名(内女子67名)

⑧国籍別(計8ヶ国)——日本(113)

マレーシア(4)、フィリピン、オーストラリア、台湾(各2)、ペルー、スイス、タイ(各1)

⑨大学別(計38校)——津田塾大(23)、東大、上智大(各12)、早大(10)、慶大(7)、東外大(6)、成蹊大(5)、筑波大(4)、立大、神戸大、明大、お茶の水女大(各3)、一橋大、電通大、明治学院大、ICU、同志社大、国際商大、日本女子大、聖心女子大(各2)、名古屋大、東洋大、城西大、東工大、神奈川大、横浜国大、天理大、都立大、立命館大、東京女子大、青山学院大、武蔵大、大妻女子大、実践女子大、成城大、上智短大、富士短大、相模女子短大(各1)

◇◇

昨秋来、中嶋嶺雄委員長を中心に国際プログラム委員会が協議の結果、今回の国際学生セミナーも前回二回にひきつづき主題「文化接

触と日本」を追うこと、ただし前回が総論的なアプローチを試みたのに対して、今回と次回はこの地域研究に移し、今回はアジア・太平洋諸地域との関連で「相互依存」に、次回は欧米との接触で「移入文化」に考察の焦点をすえ、その実体を究めることとした。

中嶋氏が開講にあたって本セミナーの意図にふれ、一九八〇年代は不可測性のますます深まる時代であり、国際的相互依存関係が深まれば深まるほど、相互理解の困難さが問題になることを、現在のイラン、アフガニスタン、中国などの問題を例にして強調されたが、この三日間にわたるセミナーを通じて参加者それぞれが、「文化接触」といっても、そこには実に多くの見方、粗密の差があり、真の相互理解の前にはまだまだ未知の領域が広く横たわっていることを実感したようである。とくに人数は少なかったが、留学生諸君の発言にはやはり日本人同士からは得られない、きびしく鋭い批判があり、国際セミナーならではの体験になったにちがいない。各セクション演習の指導にあられた諸先生の熱意と学生たちの呼応が時とともに盛り上がり、充実した討論と感動をうんだことは幸いだった。

◇◇

こんどのセミナーの主眼が地域研究におかれ、セクション演習もそれに沿って編成された結果、問題が具体性をもって捉えられ認識されたことは収穫であり、今後への一つの示唆となった。以下セクションごとに、そこでの議論の中心テーマをごく簡単に要約した

い。

A セクションではまず平野氏から、日本の近代化を東アジアとの接触の過程で関連づける場合に、一つの具体的手がかりとして石光真清の自伝四部作(「城下の人」ほか)をあげ、そこに同じく近代化をめざしながらも複雑な接触と離反を示した日中関係の歴史を見直すための格好な素材があることを紹介された。演習では中国のほかに朝鮮、琉球との文化接触が議題のほり、とくに言語移転の問題から国内での標準語教育批判にまで及び、沖縄から逆に内地文化を見る視点の必要性などが論議された。

B セクションでは菊地氏から異文化理解の方法論として、その相異性を重視する従来の傾向に対して、むしろ日本文化との共通性を理解の切りどころとして、それぞれの地域性と時代の特殊性を明らかにしてゆくことの必要が説かれ、フィリピンにおける多年のフィールド・ワークから、たとえ日本の遺牌継承文化、祖先崇拜文化、家族概念等と異国文化との比較観察の経験が語られた。演習では外国における日本人の開鎖性が、日本人町とか日本企業の労務管理などを例に論議の対象にあげられた。

C セクションで片倉氏はまずアラブと日本との違いとして、①生産様式、②生活様式、③集団様式の三つをあげ、①からは遊牧民的合理主義、契約主義、②からはアラブ特有の強烈な宗教観、③からは両極型(個人志向と集団志向の混交型)の行動様式をみちびき出して説明された。演習ではとくに

D セクションでは広野氏から現下の国際環境の中でのアジア・太平洋地域の役割、その中での日豪関係の特殊性についての説明があり、従来北からの視点から捉えられてきた南北関係が逆に南の立場から見直される時代の近迫を感じさせる兆候にふれられた。そして一種のユニホーム文化の温室に安住した日本人はこれから国際的対立の中ではつきり自己を主張しうるだけの論理とコトバを持たねばならぬと強調された。演習では日豪関係の問題と可能性について政治、経済、軍事、文化の各面からの具体的な分析が試みられた。

E セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

F セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

G セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

H セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

I セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

J セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

K セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

L セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

M セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

N セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

O セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

P セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

Q セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

R セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

S セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

T セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

U セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。

V セクションでは中川氏から産業化の進展にもかかわらず、階層差が依然として大きく存在するラテン・アメリカ特有の複合社会の実態と、そこからくる日本社会とある種の共通性と異質性の解明が今後の課題としてあげられた。演習ではペルー留学生の参加もあり、日本企業の進出に対する現地ではげいしい警戒心など、当面の現実問題の分析と物心両面からの相互依存の可能性の所在をめぐり論議がなされた。



議論白熱の全体集会

◇◇

二日目にはピーター・ミルワード教授によるゲスト講演「日本人の日本知らず」が約一時間半にわたり、流暢な日本語によって行われた。イギリス人お得意のユーモアをまじえ、東西のことわざを引用しながら、在日二五年の体験をもとに、日本文化論、日英比較論を淡々と披露された。心は心に話しかける。発言する権利と同時に沈黙の権利を。コスモポリタンでなく伝統に根ざした日本文化を。偏狭な国家主義ではないが、国を愛し、家を愛し、自分を愛し、他を憎悪せず、等々。主調は人間性を中心とする保守主義のすすめにおかれていた。

◇◇

三日目の全体集会在が議長団学生

◆現代史の曲り角に立って

今年も八王子の丘に国際交流の輪が広がった。若い留学生諸君と日本人学生、それ今回若干の社会人や高齢の女性教師も一参加者として加わりながら、国際接点の諸断面を真剣に語り合い、それぞれが熱い思いを胸にして散っていった。これからの国際社会をいかに生きてゆくべきか、そのためにはどのような視野と勉学が必要かを、さまざまな体験や知識を一杯おつけて論じ合っている雰囲気においては、もはや国際交流という言葉それ自身が軽々しく感じられるほどであった。

の用意周到な司会によって参加者全員の見聞をあつめて行われた。文化とは何か、個人レベルでの文化接点はどうあるべきか、アジア・太平洋地域の諸国にとって真の利益につながる相互依存とは何か、等々と問題は核心にしぼられ論議は白熱した。とくにマレーシア留学生から、日本でいう文化交流も結局は経済進出の手段にすぎぬのではないかと疑問が投げられたのを機に、かつての大東亜共栄圏の発想、経済帝国主義への批判に関心が集まった。その中で戦前、朝鮮民族博物館をつくり、民芸の伝統を守ることに関心をもち、むけた柳宗悦という一人の人間の存在を指摘する声があり、それに対する反論などがあった。

閉会間際にペルーからの女子留

運営委員長 中嶋 嶺 雄

学生が発言を求め、今回のセミナーに参加しての感想を切々と訴えた。

「今までの世界は二つの部分、お金持の国と貧乏な国に分かれていた。日本やアメリカなど先進国が成長したのは、みんな私たちのギセイのおかげです。労働者のギセイで利益はみんな日本やアメリカに戻っていく。こういうセミナーも賛成だけれども、机上の空論じゃないかな。あなたがた、社会に出ると忘れるのじゃないかな。一人、一人、自分の周囲で、自分の家庭で、ぜひ今日のことを伝えて下さい。」

このペルー留学生のことばがセミナーの総括をうながした形で、会場にある緊張の時を与えた。個人レベルでのキレイゴト、お題目

をとなえるだけの文化接点に対する自己反省の声もあがった。

以上、セミナーの経過を簡単に追ってきたが、この三日間、文字通り寝食を共にして指導にあられた先生方、企画段階から計画実施の細部までお世話いただいた運営委員の先生方、さらにはこの三日間、積極的に連絡、司会の労をとられた学生委員の方々から感謝を述べたい。

なお、このセミナーのより詳細な報告書が目下学生有志諸君の手をかりて編集中であり、今秋には発行の予定である。

▼日本観を変えた体験

エロディア・エスピノザ

日本の大学に入学してから、こ

と初めて国際学生セミナーに参加し、大学セミナー・ハウスを利用しました。このわずかな三日間の集まりで、私の日本観は変わりました。日本・日本人に対する理解が一段進みました。

この三日間、約四〇大学の学生と教授が集まって、同じ目標に向かって議論をつづけ、まとまった結論はなかったけれども、私たちの心のなかに何か通じ合うものがありました。このセミナーを通じて、私が今後どんな文化と接触しても、お互いの文化を尊重し勉強し合っているという気持ちを生み出した。戦争とかゲリラとかに向かう悪いエネルギーを、私たちは美しくきれいな世界のためにこそ使わなければなりません。

セミナー・ハウスのなかで道に迷う私にいつも声をかけ助けてくれた多くの仲間たち、ほんとうにありがとう。さいごはとも離れなくなかった。

(神戸大学研究生「ペルー出身」)

▼カルチア・シヨック

西野 博之

大学セミナー・ハウスでの三日間は、私にとって何にかえがたい貴重な経験になりました。大学入学以来一年、高校時代と本質的に何ら変わらない自分に空しさや焦らだちを覚え、何かを期待して参加しました。私のセクションは「東アジアと日本の近代化」をテーマにしたものですが、最初の演習から大きな衝撃を受けました。参加者の一人一人がしっかりした問題意識をもち、常に謙虚で、しかも新知識への食欲なまでの欲求をもって臨んでいるのを肌で感じて、アイデンティティのかけらすらも持ち合わせていない私は、なんだかたまらない妬みを彼らに感じました。時が経つにつれて、しだいに言葉をなくしている自分に気がつきました。この時ぐらい、自分を情なく思ったことはありません。

今までゼミもゼミ合宿も経験したことのない私にとって、朝の四時ごろまで延々と続けられた討論は、まさに「カルチア・シヨック」そのものでした。これからの生き方を考える上で貴重な体験になり、喜びでいっぱいです。早く自分の言葉をもつ人間になりたいと思います。

(立教大学文学部2年)

〈表1-A〉 大学共同セミナー

回数	期間	主 題	指 導 者 名	参加人員
第102回 (1)	54年 5月25日 ～27日	学問の移植と創造 —近代日本の場合— (故正田建次郎先生 追悼記念)	今道友信 吉田耕作 *村田 全 中川米造 小泉 仰 水谷静夫 長 幸男	26名 (17校)
第103回 (2)	7月13日 ～15日	空間と人間生活 —自然・人間の適 正規模—	吉田光邦 *香原志勢 小田 晋 中村陽吉 戸沼幸市 *谷口汎邦	64名 (24校)
第104回 (3)	10月12日 ～14日	ルソーと共に 現代を問う —人間は自由なもの として生まれた—	原 好男 *小林善彦 林 道義 室 俊司 宮島 喬 海老沢敏	46名 (19校)
第105回 (4)	11月9日 ～11日	日本人と《家》 —新しい人間の絆 を求めて—	小山 隆 加賀乙彦 正岡寛司 相沢韶男 *熊坂敦子 鳥居邦朗 (山岸健)	67名 (25校)
第106回 (5)	12月7日 ～9日	1980年代の世界経済 (大内力先生の退官 を記念して)	大内 力 隅谷三喜男 *馬場宏二 佐藤経明 森田桐郎 大内秀明	72名 (25校)
第107回 (6)	55年 1月11日 ～13日	仏教と人生 —仏教における真・ 善・美の探求—	山崎正一 峰島旭雄 吉田宏哲 島田外志夫 *横山紘一 西谷啓治 山内恭彦 三枝充恵	56名 (26校)
第108回 (7)	3月12日 ～14日	イスラムの世界 —その文明の現代 的意義—	三木 亘 黒田壽郎 池田 修 中村廣治郎 片倉もところ 佐藤 次高 中岡三益 *板垣雄三 藤田進	104名 (28校)

〈表1-B〉 大学院共同セミナー

第1回 <夏の部>	54年6月 23～25日	諸学の系譜と真理愛 —方法論の再検討—	前田護郎 柳瀬陸男 塚田 理 田村光三 山下幸夫 鈴木 皇 (岡宏子)	36名 (20校)
(2回連続 セミナー) <冬の部>	11月30日 ～12月1日	諸学の系譜と真理愛 (その2) —方法論の再検討—	前田護郎 *岡 宏子 塚田 理 田村光三 山下幸夫 鈴木 皇	23名 (14校)

*印は、運営委員を兼ねた講師。()内は運営委員を示す。

〈表2〉【②学科別参加者数】

	参加者数	計・比率	
文学 哲学 教育学 芸術学 その他の人文科学	102 (75) 20 (19) 21 (7) 20 (15) 3 (3) 8 (4) 9 (4)	} 183 42%	
法学 政治学 経済学 社会学 国際関係学 その他の社会科学	50 (7) 47 (4) 33 (20) 17 (16) 3 (2)		} 150 35%
理工学 工学 農学 医学・歯学・薬学	13 (5) 39 12 (2) 13		
家 政	6 (6)		6 1%
そ の 他	19 (6)		19 4%
合 計	435 (195)		435 100%

参加が目立った。上位五校のうち早稲田、東京、慶応、津田塾の四校の顔ぶれは例年と変わらないが、新たに日本女子が入った。男女の割合は五五対四五で全体としては男子が多いが、私立に限ってみると、51年度から連続していることであるが、女子が男子を上回っている。

表2②は、参加者の所属学科により専攻分野を見たものである。52、53年度の傾向と比較すると、人文系の減少は分だけ自然系が増えた形となり、人文・社会・自然のバランスがよく、企画サイドから考えれば、年間のテーマの取り上げ方は成功したといえてよいだろう。

一方、昭和54年度は、学部学生を対象とした大学共同セミナーが大学院教育にその間口を広げた、という意味で記念すべき年であった。二回連続形式を取り入れ、新

〈表2〉【③学年・男女別参加者数】

区分	1年	2年	3年	4年	大学院	その他	計	比率(%)
男	26	39	65	56	31	23	240	55
女	16	59	66	32	13	9	195	45
計	42	98	131	88	44	32	435	100
比率(%)	10	23	30	20	10	7	100	

(注) ()内は内数で女子。

その他…研究生、聴講生、専修科、大学校、卒業生、中高教員。

昭和54年度 大学共同セミナー白書

昭和54年度は、表1-Aのように計7回の共同セミナーを実施した。参加者総数は、表2①(次頁)に見るように四三三五名、各回平均六二名となつて、数の面では全体的な落ち込みが目立った。平均六二名は、共同セミナーの歴史

の中で最少を記録した昭和48年と同数である。ここ数年、平均が九〇(一〇〇名の間であつた)ことを考えると、大学間交流の先駆的役割を果たした共同セミナーが、70年代の終わりにきて、ある種の転換期を迎えていることは確かである。

ろう。しかし、第108回のように一〇〇名を超える盛況なセミナーもあり、教育の現場としての大学と、現代の学問状況ともいふべきものの間に横たわるギャップを埋めるようなテーマが取り上げられる。共同セミナーの存在意義はまだまだ大きいといえる。

大学数は、参加者数の割には多く、六五校を数え、地方の大学の

たに発足した大学院共同セミナーについては表1-Bを参照されたい。参加状況の表は省略した。

●寄付金報告

54年12月～55年3月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

- △一般寄付金▽
神奈川大学小山吉之助ゼミ殿
飯田八千代殿
松本樺太殿
一橋大学米川ゼミ殿
△視聴覚施設・設備充実募金▽
早稲田大学政経学部鳴ゼミ殿
東京理科大学大沢研究室殿
セミナー参加者一同殿
慶応義塾大学教授
工学院大学助教殿
東京農業大学果樹園芸
研究室助手 宮田正信殿
セミナー参加者一同殿
セミナー指導教授一同殿
第108回大学共同
セミナー参加者一同殿
第108回大学共同
セミナー指導教授一同殿
第7回国際学生セミナー
指導教授・運営委員一同殿
セミナー参加者一同殿
早稲田大学外事課
課長 山代昌希殿
△現物寄付▽
50号油絵「マンダラ」一点
フリッソン代表 小山右人殿

茶道具キャビネット一個
第106回大学共同セミナー
指導教授一同殿

植樹「はなみずき」一本
早稲田大学商学部片山ゼミ殿
植樹「こぶし」一本
相模女子大学長 山崎 進殿
けやき苗木34本・くるみ6本
東京農業大学岩崎ゼミ
卒業記念 岩崎代志治殿

△植樹寄付金▽
都立立川短期大学殿
六〇,〇〇〇円
日豪調査委員会 広田耕司殿
一〇,〇〇〇円
専修大学公鳳会運営
委員長・教授 中村秀一郎殿
一〇,〇〇〇円
経営士研修プログラム
宮崎 肇殿

●寄贈図書

54年11～12月

- 「科学史入門」ガロアと群論 江沢 洋殿
「国東半島の民話」第一～三集、八王子・日野・府中・調布・町田史跡散歩」他二冊 芥川龍男殿
「女性と宗教」キリスト教と文明の風土」 聖心女子大キリスト教文化研究
「金融経済」178～179「物価史」第3巻 金融経済研究所殿
「国際協力」10～11月 国際協力事業団殿
「現代家族の研究」「コミュニティ」9 小山 隆殿
「南北問題」講座マルクス経済学」1・6・7巻 森田桐郎殿
「採集と飼育」11～1月 日本科学協会殿
「社会科学研究」19

〈表2〉大学共同セミナー参加状況(計7回)

【①大学別参加者数】

Table with columns for university type (National, Public, Private), university name, and participant count. Includes a detailed list of participants for the 4th joint seminar on December 18th at 20:00.

「政治経済史学」162～163
政治経済史学会
「早稲田フォーラム」
早稲田大学広報課殿
昭和54年度
第4回共同セミナー委員会
3月10日(月) 18時～20時半
於・私学会館
今回は昭和54年度最後の委員会に当たり、別記12名の委員の出席があった。
主な議事は、昭和54年度の大学共同セミナーの総括と55年度の企画について。前者は、8頁掲載の共同セミナー白書を参照された。後者については、前回の委員で承認された開館十五周年記念を中心とする三回の共同セミナーの準備経過報告に併せて、社会人参

加の許容範囲、学生の参加経費などが話し合われ、当面は社会人が全体の二割を超えない範囲で認めながら、彼らの意見や感想を聞くなどして生涯教育の方向を探ること、学生の負担を最少限度に抑えるも次年度の参加経費を八、五〇〇円(現行七、八〇〇円)とすることに意見の一致をみた。
なお、夕食後の自由懇談で、企画室所轄の次年度事業計画案の全容と、企画室が当面している問題点の説明が参考までに主事よりなされ、種々の意見交換が行われた。
【出席者】 岡宏子、野田春彦、山岸健、黒田道雄、佐竹寛、友部直、板垣雄三、熊坂敦子、高須裕三、今井義夫、富塚文太郎、馬場伸也 (敬称略)

◆千人会

昭和55年2月3日

◆現在会員は、六一〇名です

大学人 二一、二〇八名
社会人 二 四〇二名

◆新しく会員となられた方々

6名(第53回報告(申込順))

C 白梅学園短期大学教授

B 明治大学教授 牧野 誠一殿

C 神奈川県立座間高校教授

A 中央大学教授 宮岡 幸雄殿

C 青山学院短期大学講師

C 翻訳業 柳父 圀近殿

◇会費ありがとうございます

55年2月~3月(敬称略)

金子ハルオ、岩佐凱美、山口俊夫、脇田良一、永島孝、喜多村得也、石井正博、吉田耕作、本谷勲、谷資信、板橋並治、今井清一、高橋潤二郎、新保清子、稲毛よし枝、京極純一、丹下みさを、玉野井芳郎、光延明洋、飯尾右一、渡辺忠市、矢田俊文、平岡勇、磯村英一、吉田公保、遠藤平治、土屋金彌、木村増三、中村孝之、徳座晃子、牧野誠一、富岡幸雄、大須賀節雄、岡田純一、飯田修一、板垣雄三、久世寛信、島田征夫、山田昭房、昌谷春海、斎藤国治、坂本是忠、田中英夫、田辺留次郎、黒沼稔、大岡信、吉阪隆正、秋間実、森昭彦、斎藤眞、原田敬一、今井裕之、井原恵治、小泉仰、高橋彰、松島千代野、増谷和子、佐藤直子、窪田庄十郎、伊藤千秋、本間仁、中岡二郎、櫻崎彰男、一丸節夫、松田正一、小林望、力石誠之介、近藤圭一、遠藤卓夫、箕輪成男、金子克美、崎野滋樹、

宮崎七重、笠耐、磯直道、勢山秀子、木村康雄、西田貴子、平野由紀子、西川恭治、若林玄修、子安宣邦、豊田陽子、足立美比古、東川清一、澤本孝久、市川孝正、加藤信朗、熊澤義宣、柳父圀近、荒川孝子、村井孝子、林清、彦由一太、鈴木昭、島美喜子、外山崇行、蓮見音彦、野澤農、村井実、玉川一郎、福越敬、司馬正次、中島徹、梅村魁、永寿巳夫、松原秀一、増沢利幸、中村妙子、平田道憲、佐藤毅、瀬部孝、谷口汎邦、所司真理子、勝見允行、石原忠男、良知力、中島力、寺中良二、最上武雄、那須宗一、絹川正吉、原芳男、永野賢、西川大二郎、富子勝久、人見宏、高橋良太郎、中田良平、新澤雄一、杉山逸男、安藤英治、大川郁子、久保亮五、五唐勝一、松信、栢植敏治、村松林太郎、永井道雄、菊地昌典、木村健一、井村君江、松尾弘、西村閑也、栗原俊記、小幡史朗、白川和雄、小島慶三、土井恵美子、保坂栄一、牛島忠広、細井勉、山田良之助、大西清、市川邦彦、寺内礼治郎、藤木宏幸、河田喬夫、熊坂敦子、小原啓義、平野鉄太郎、富塚文太郎、目黒謙次郎、佐野厚子、喜多村和之、増田武男、三神照、石坂巖、松崎義徳、高橋和之、丸山真男、天野一夫、大泉充郎、鴨澤巖、浅野弥祐、三上次男、馬場伸也、大塚正夫、太田淳一、佐藤公孝、中西久美子、楢田信男、望月清司、金子靖、池田義人、立入広太郎、平沢薫、寿里茂、古川晴高、岡村総吾、渡辺武雄、小山五郎、高瀬文志郎、村田全、向坊隆、島田治夫、福田基、村田晴夫、横田忠夫、近藤薫樹、上野一、加藤六美、島田史子、満田郁夫、木田宏、手塚喬介、梶谷尚、龍池隆、中島康孝、大田末穂、川上美枝子、小林弘、松野賢吾、村上泰治、辻清明、村田和巳

◇会費に添えられた言葉を拾う

遠い南の島から、八〇年代における大学セミナー・ハウスの新たな発展を祈念いたします。

沖繩国際大学教授 玉野井芳郎

本年もお蔭さまで、元気に誕生日を迎えて、会費の送れるよろこびを感じています。

平岡公認会計事務所 平岡 勇

はじめて会費をお送りします。広く学際的・年齢的(年齢をこえたという意味です)ご交誼をお願いいたします。当方 英文学および教育専攻です。

麻布高校教諭 森 昭彦

詩情あふれる宮下先生ご制作のカードありがとうございます。

東京都立大学助教 秋間 実

千人会の発足当時から参加させて頂いておられます。ますますご発展を祈ります。

東京理科大嘱託教授 窪田庄十郎

飯田館長様にはお健やかにて古稀をお迎えとの御事、誠に心からお祈り申し上げます。今年こそ、いぬもさるも同行させていただきます。遠来荘のお茶席を一日ゆっくりに拝借させていただきます。思っております。

東急百貨店 西田貴子

送金が一週間もおくれましてお許し下さい。私も六三歳を迎えましたが、いつまでもこれを続けられるよう願っております。

玉川大学 勢山秀子

今までC会員でしたが、今回からB会員としてお取引らい下さいます。

中央大学教授 近藤圭一

美しい誕生カードを賜り、ありがとうございます。小生の主宰する月刊雑誌『政治経済史学』は、毎号セミナー・ハウス図書館に寄贈させていただいていますが、創刊以来十七周年で第一六五号を達成いたしました。これまでC会員でしたが、今年からB会員に変更させていただきます。貴館、益々の御発展を祈ります。

玉川大学教授 彦由一太

開館十五周年と飯田館長七十歳に対して心よりお祝い申し上げます。社会に対する大学人のコミットメントの表白として、大学セミナー・ハウスが支持されてゆかれるよう望みます。

国際基督教大学教授 絹川正吉

カードをありがとうございます。今更ながら驚嘆しています。飯田先生あつてのセミナー・ハウス、くれぐれも御自愛のほどを。

上智大学教授 人見 宏

今年が喜寿記念に何か出版したく思っています。

都立大学名誉教授 五唐 勝

昨暮に行いました大学院ゼミはお蔭様でも好評でした。今後定期的にお世話になるつもりであります。

東京農工大学助教 牛島忠広

血のかよったあたたかい生きた誕生カードをいただきました。セミナー・ハウスの生きざまがひしひしと感ぜられます。七十歳になりました。この地上に生命が与えられ幼児教育への意欲を燃し得ることを感謝しております。

下妻小友幼稚園長 福西 基

セミナー・ハウスの丘ではきつと春の息吹がいっぱいでしょう。また学生たちと行きたいと思っています。武蔵大学教授 村田晴夫

大学セミナー・ハウスの堅実な発展を希望します。

東工大名誉教授 山田良之助

飯田先生、先日はごていねいなお手紙ありがとうございました。遅くなりましたが、古稀のお祝いを申し上げます。わずかばかりのお金ですが、自分が働いて得たお金で、少しも役に立つと思うととてもうれしゅうございます。ご健康をお祈りしております。

県立座間高校教諭 川上美枝子

あいかわらず世俗のことに追い廻されて、とうとうセミナー・ハウスにも行けません。80年代B会員にして頂いて伺えるのを楽しみにしています。

立教女学院短大教授 村上泰治

第42回理事会・第25回評議員会

昭和55年3月21日／丸の内銀行倶楽部

昭和54年度利用状況ならびに収支決算見込

昭和55年度事業計画

利用料金の改定案ならびに昭和55年度収支予算

評議員人事

出席者

理事 茅誠司、川喜田愛郎、村井資長、中村哲、沼田稲次郎、戸田修三、小谷正雄、飯田宗一郎、岡山猛

監事 岡山猛

評議員 川原栄峰、三宅彰、板垣興一、小川芳男、村山松雄、鈴木勝(代理坂井健一)、平出宣道、朝倉孝吉、中川秀恭、山崎進、山辺武郎、田中義男(代理佐藤博)

委任状による者 76名

理事会・評議員会合同会議のため、評議員会の議案については中村哲氏が議長となり審議が進められた。

冒頭に茅理事長から挨拶があり、続いて岡山専務理事より上掲の議案につき逐次説明、それぞれ質疑応答のため、賛成多数で可決承認された。議案のうち、昭和54年度利用状況ならびに収支決算については昭和55年度収支予算とともに次号に報告することとし、ここでは昭和55年度の事業計画のあらましと利用料金の改定および役員人事についての説明にとどめた。

昭和55年度事業計画について

今年度は開館十五周年にあたる。過去の実績の上に立ち、社会的状況の変化等をふまえての長期的展望と、それを支える財政計画を用意、確立すべき時期である。当ハウスは設立の趣旨からいって利用者のための施設であり、利用者本位に運営されるべきである。内外の衆知をかり将来構想をかためたく、ひろく意見を求めたいところである。以下はその計画の要点である。

(1)年間利用者数の確保と利用率の向上が事業目標の基本である。今年度は54年度の実績五万三千人を最低目標とした(利用料金改定など諸条件との関連での配慮)。(2)協力会員校を中心とする利用者とのより緊密な連携による情報活動その他、利用促進策の推進。(3)法人の事業目的から逸脱せぬ範囲内での、教育・文化団体および社会人等の各種研修への一層の協力。

(4)国際化時代に対応しての国際交流プログラム、生涯教育時代に等、新規事業企画の開発。(5)従来の大学共同セミナー、大学院共同セミナー、大学教員懇談会、国際学生セミナーに加えて大学共同セミナーへの協力推進。(6)ユニット宿舎村を中心、老朽化した施設の補修、洗面所、トイレ等の増改築、冷暖房施設等の改善。

昭和55年度宿泊・食事料金改定表

(昭和55年4月1日実施)

単位=円、()内=改定前料金

*食事代(定食)

Table with 4 columns: 朝食, 昼食, 夕食, 計. Values: 450(450), 550(550), 900(700), 1,900(1,700)

*宿泊料(1泊につき)

<ユニット・ハウス>

Table with 3 columns: 区分, 学生, 教師. Values: 会員校 1,700(1,500) 2,200(2,000); 非会員校 1,900(1,700) 2,400(2,000)

<長期セミナー館>

Table with 3 columns: 区分, 学教, 生師. Values: 会員校 2,000(1,700) 2,500(2,200); 非会員校 2,200(1,900) 2,700(2,200); 学術教育学会 2,800(2,500); 社会人団体 3,100(2,800)

<国際セミナー館>

Table with 3 columns: 区分, 学大, 生者人. Values: 学大 2,500(2,000) 3,000(2,600); 研究会 3,000(2,600) 3,500(3,000); 社大 3,500(3,000)

<教師館(松下館)>

Table with 3 columns: 区分, 大学研究者, 社会人. Values: 1~7号室 1人 3,000(2,700) 4,000(3,300); 8号室 1人 4,000(3,700) 5,000(4,500); 2人の場合 1人 3,000(2,800) 4,000(3,400)

(7)施設の拡充、補修を目的とする募金(開館十五周年記念事業の一環として)の実施。試験研究法人等証明による文部省認可一億二千万円を目標に募金委員会を中心に推進。

(8)当ハウスを利用、もしくは当法人の事業に賛同する法人を対象とする賛助会員制(年会費一口十万円)の新設。

(9)職員の待遇改善。昨年度から数ヵ年計画で改善をめざし、さしあたり都下中小企業の賃金水準を目標に努力、ただし人員抑制により年間人件費増を最少限に抑える(前年比二四六万増を計上)。

利用料金の改定について

昭和54年度はご存知のとおりオイル代の急騰があり、今年度はこれに加えて電気、ガス等公共料金の値上りをはじめ諸物価、諸経費の増大が予想され、それへの対応策として別掲のとおり利用料金の改定をせざるをえなかった。ちなみに当ハウスの収入の最大部分(構成比六六%)を利用料金によって

おり、それにつく協力会員校会費は前年度に増額改定したもので今回は据え置いた。利用者各位の理解と協力をねがいたい。

利用料金の改定内容は宿泊料が平均一三・一%、施設使用料が平均一・一・五%、食事が一日通して一・八%、それに施設改修協力金が日数に関係なく一人二〇〇円を三〇〇円に、従って五〇%、それぞれアップになる。

会員校学生が普通利用しているユニット・ハウスの場合、従来一泊一、五〇〇円が一、七〇〇円、教師が二、〇〇〇円が一、二〇〇円になる。ただし会員校の場合、講堂とかセミナー室といった研修施設の使用料は従来どおり無料とする。

食事代の内訳は朝食四五〇円、昼食五五〇円は共に据え置き、夕食七〇〇円を九〇〇円と二〇〇円値上げした。

なお、五泊以上利用の場合には宿泊料、施設使用料とも全期間について一割引とすることに今回新

(注) 5泊以上の利用の場合には、すべての宿泊室(改定前は長期セミナー館、国際セミナー館、教師館、ゲスト・ルームのみ)の宿泊料、施設使用料とも、全期間について1割引とする。

たに決まったことも付記したい。詳しくは新料金表をご覧いただきたい。きたく、事業部にお問合せねがいたい。

評議員人事について

職務の異動または死亡により退任の評議員四名に代わり新たに会員校代表者として評議員に委嘱する者三名について理事長より以下の提案があり、承認された。

- 新任された評議員: 千葉大学長 香月秀雄氏, 東京学芸大学長 阿部 猛氏, 成蹊大学長 朝倉孝吉氏, 退任された評議員: 前東京学芸大学長 太田善磨氏, 前成蹊大学長 福與正治氏, 元教育大学名誉教授 朝永振一郎氏

- 元筑波大学長 三輪知雄氏 (専務理事 岡山記)

事業部だより

●学年末試験明けに合宿再開

—2月のキャンパスより

学年末試験で大学関係の利用が少なくなる1月がようやく明けると、2月は、一足先に試験を終えた私立大学グループの合宿が再開され、この丘に活気が戻る。「卒論発表」などの合宿も多い。この月のグループ数一、二、宿泊延人数三、八六九人——これはいづれも前月の二倍以上の数字である。これで、昨年引続き二年連続、厳寒の2月に一〇〇を上廻るグループを迎えたことになる。成蹊大・中里明彦助教が(1月末から2月はじめの一週間に三つのグループ(成蹊大二、津田塾大一)の合宿で連続指導に当たられた。この月最大の利用——専修大「公鳳会(こうほうかい)」の新入会員合宿セミナーは、2月3日(日)の午後から5日(火)の昼食まで、二泊三日で行われ、教員・職員・学生計一七三名が参加した。初日は、開講式に引き続き行われた高橋長太郎学長の講演、公鳳会ガイダンス、グループ別討議、夕食後は懇親会と自己研修、2日目はシンポジウム、就職決定者体験談と再びグループ別討議、スポーツ、夕食後には龍角散本舗社長藤井康男氏による講演「80年代の日本社会」、3日目は昼食時の閉講式までグループ別討議——といった日程が進められ、終始教職員と学生との間の緊密な人間的交流と



専修大学公鳳会の講演風景(大学院セミナー館)

一体感を感じさせる大型合宿であった。公鳳会「育ての親」で、同会創立以来運営委員長をつとめられる経済学部・中村秀一郎教授に別掲の一文をお寄せいただいた。この他、毎年試験明けのこの月には、クラブ活動やサークルなど、バラエティに富んだ課外活動の合宿も多くなる。当ハウス構内の民家「遠来荘」の調査で一泊した法政大民家研究会、養護学校の問題を話し合った学習院大社会学部研究会、東京女子大英語会、立教大聖書研究会、明治学院大グリクラブ等々。そして武蔵大と横浜国大は恒例の体育系サークル指導者の大型合宿を実施し、一年間の総括・反省を行っている。

また、大学連合グループの利用も目立った。全関東学生商業連盟、複合農業研究会、第6回インドラ共同研究会など、いずれも複数大学共同の学年末合宿であった。●学年末・春休みの多彩な合宿セミナー——3月の利用から春休みを利用して二、三泊(通

常は一、二泊)以上のグループが顕著に多くなるのも、この時期の特徴である。従って利用グループ数は一二と2月よりむしろ少ないが、逆に宿泊延人数の五、〇四六人は8、9月に次いで本年度三番目に多い数字である。なお、3月の延利用者が五、〇〇〇人を超えたのは開館以来初めてのことである。

●「公鳳会」教員・職員・学生交流セミナーを開催して

専修大学教授 中村秀一郎

専修大学では、他大学と同様に公務員への就職希望者が急増していますが、国家・中級・地方上級公務員が、これに準ずる試験に合格するものは少ないのが現状です。それは、公務員試験が、教養・専門の全般にわたるきわめて広い範囲から出題されるために、大学卒の名に値する基本的知識と能力が求められるからなのです。このような実力は、四年次に進んでから「一夜漬け」勉強で身につくものではなく、四年間にわたる着実な勉学によらなければ、獲得されないのです。公鳳会とは、公務員試験の合格を目ざす、二、三年次学生諸君を会員とする、総合学力レベルアップのための研究

常は一、二泊)以上のグループが顕著に多くなるのも、この時期の特徴である。従って利用グループ数は一二と2月よりむしろ少ないが、逆に宿泊延人数の五、〇四六人は8、9月に次いで本年度三番目に多い数字である。なお、3月の延利用者が五、〇〇〇人を超えたのは開館以来初めてのことである。

この中には、当ハウスでの合宿五〇回以上という東工大・松田武彦教授のシステム・マネジメント・セミナー(五〇名)、内外の学生とともに3月なかばには必ず姿を見せてくれる芳賀敏、小堀桂一郎、佐伯彰一各氏らの東大比較文学・比較文化研究室(四八名)、そして一四年連続・春夏冬各一週間の合宿を定例化してきた杉野女

子大教育原理ゼミなど、この季節の常連が多い。また、全国一二大学の学生とフランス人講師計三名が「生活もフランス語で」九日間を過ごす語学教育振興会(COLT)の仏語集中訓練セミナー、これも全国各地の中・高校英語教師と外国人講師計九五名が「英語だけで」一週間を過ごす英語教育協議会(ELCC)のセミナーなど、常連語学研修グループの長期滞在は、今年も春休みのキャンパスに国際色を添えた。

専修大学教授 中村秀一郎
会で、昭和52年4月に創立され、たんなる講習会ではなく、それぞれの教科の徹底理解を目標としているので、多くのテストを積み重ね、その結果を会員に知らせ、自分自身の向上をたしなめ、自ら努力させるといふキメの細かな学習指導を行っています。この指導は各学部のベテラン教授陣と学生指導の経験豊かな職員スタッフが協力し、教職員が一体となって行っています。教職員の集団指導による「大型ゼミナール」であり、会員数は四五〇名となっています。公鳳会の指導の原則は、いわゆる予備校とは全く異なり、会員の子弟大教育原理ゼミなど、この季節の常連が多い。また、全国一二大学の学生とフランス人講師計三名が「生活もフランス語で」九日間を過ごす語学教育振興会(COLT)の仏語集中訓練セミナー、これも全国各地の中・高校英語教師と外国人講師計九五名が「英語だけで」一週間を過ごす英語教育協議会(ELCC)のセミナーなど、常連語学研修グループの長期滞在は、今年も春休みのキャンパスに国際色を添えた。

諸君は「ガリ勉」を要求されることはありません。われわれはゼミナールでの研究、クラブでの活動、若者らしいレジャーと勉学を両立させることを期待しています。公鳳会は、時間となく過ぐす短い時間を積極的に活用するというテーマをかかげて、これを実行しているのです。この2月、セミナー・ハウスで行った新入会員を対象とした合宿は、公鳳会としては、はじめての試みでしたが、教・職・学が一体となり、学外からのゲストの参加も得て、各人の「自分史」を語り合ったことは、情性に流れやすい大学生活のマンネリズムを打破し、会員学生諸君の達成動機を高めるのに役立ったように思われるのです。この期間、この二つのセミナーでの指導を引き受けられた津田塾大の片倉もとこ教授は、前後六日間当ハウスの任人となられた。成蹊大の広野良吉教授は、国際セミナーでの指導を終えられると、その日から今度はご自分の大学のゼミ合宿でさらに二泊された。同ゼミの学生のうち、確か二、三人も、先生とともに国際セミナーに参加し、引続きこのゼミ合宿に残った筈である。また、共同セミナー「イスラムの世界」に参加した津田塾大の学生の一人は、数日後に始まった前記COLTの彼語セミナーにも姿を見せたので、彼女は春休みのうちの一二日間を当

館長日記から

◆前田護郎先生ご急逝の報が東大教授杉山好氏から入った。4月17日のことである。驚愕、痛恨、哀惜いべき言葉もない。瞬間、書物の沢山入ったカバンをさげ、この丘に姿を見せて下さるとき、温顔が私のまぶたに浮かんだ。ま

る。それでもこの丘を訪れる人々は、私の顔がいつもと違っていないのを見て安堵するらしい。私も70、平静さを「装う」演技を覚えたい。遠来荘の茶室で学んだ茶道のお陰かも知れない。◆寄付行為検討小委員会の報告を拜見した。事実と法理がかみ合っていないのが残念である。「法律的にいろいろ理窟をつけるよりもよい習慣をつくるのが大切である。ローマにおける整った法典よりもゲルマン人にはよい風習が何より大切である」(増田四郎著『歴史と社会』より)。報告書は、館長はハウスのシンボリックな指導者に徹すべきだといわれるが、事実は「象徴」ではなく「実体」なのである。利用者にとって必要なものは、ハウスのホストとしての顔であって、権威の象徴ではない。規定を改正すれば運営がうまくいくと考えるのは、規定に過大の期待を寄せるものだという意見には賛成であるが、事実と法理をかみ合わせ、魂の入った仏をつくることを第一義と考へたい。◆現代の世界的課題は「平和と人権」である。こうした視点から坂本義和、馬場伸也両教授の協力を仰ぎ15周年記念共同セミナーの主題としていただいた。私にもひそかな願いがある。奴隷の解放と反戦を説きつづけたジョン・ワルマンは敬虔なクエーカー信徒である。そのクエーカー主義に生きたいという私の信条が、平和と人権について大きな関心を持たせるのである。大

学セミナー・ハウス設立趣意書の紙背にもそうした私の思考がかくれている筈である。このテーマは春空に叫ぶ私の祈りである。

ハウスで過ごしたことになる。

●キャンパス点描

2月4日||三泊の中大・五井ゼミと専修大・公風会計一八三名が集う夕食時の食堂で節分の豆まきが行われ、教師・学生が一体となって「福は内、鬼は外」。残りの豆は当夜セミナー室でのおやつとなった。

2月14日||東京農大・岩崎代志治教授のゼミの四年生二五名が、卒業を記念して、けやき三四本、くるみ六本計四〇本の苗木を構内各所に植樹した。

2月23日||一グループ二〇八名が交流。明学大グループが合唱二曲を披露。

2月24日||第四日曜日恒例の遠来荘茶道教室は三一名の参加を得て盛況。たまたま明大・須賀ゼミと共立女子短大・小林ゼミなどが同席、思いがけぬ交歓風景が繰り広げられた。なお、3月の茶道教室には二二名が参加。

2月24日||法政大・安井郁教授の退官後もOBの指導で自主学習を続ける「安井ゼミ」が、通算一七回目の合宿で来館。OB・在校生約半数ずつの参加者一〇名を前述のお茶の席に招待、病床の安井教授を偲んで懇談のひとつを過ごした(安井氏の計報に接したの

はそれから一週間後に在泊のハグループが交歓。「原稿書き」で同日より二泊された法政大総長・中村哲氏(常務理事)が特に「卒業生のために」スピーチ。青学大・第二部聖歌隊と杉野女子大・教育原理ゼミがコーラスを披露。

3月29日||夕食時に一〇グループ二六〇名が満席の食堂で交歓。

●利用状況

Table with 2 columns: 利用状況 (Usage Status) and 関係者 (Related Parties). Rows include dates like 2月22日 and 2月23日, and names of institutions and individuals.

Table with 2 columns: 関係者 (Related Parties) and 関係者 (Related Parties). Rows list names of institutions and individuals, such as 中央大学, 法政大学, and 慶応義塾大学.

東経大学学長室長 小日向 允
 東京学芸大学助教授 内田 道男
 成城大学助教授 鈴木日出男
 成蹊大学ゴリアールアンサンブル
 横浜国立大学体育系サークル指導者
 セミナー

中央大学教授 高柳 先男
 恵泉女学園短大学長 秋田 稔
 帝京大学教師 末松隆太郎
 女子聖学院短大講師 浜田 暁
 横浜商科大学講師 平野 彦彦
 山梨県立女子短大助教授 阿部真美子

国学院大学ローバースカウト隊
 共立女子短大助教授 小林 清衛
 青学女短大講師 柳父 困近
 東京スクール・オブ・ビジネス
 全関東学生商業英語連盟
 第6回インテリ卒業論文研究会
 複合農業研究会
 万国ローア・パブテスト福音伝道協会

松本亭英語教育研究会
 国際TM協会
 韓日キリスト者友和会
 郵政省簡易保険局
 小西六写真工業**
 日本水産
 沖電気工業*
 情報処理振興事業協会

予 告

●第10回大学共同セミナー
 主題 藝術のためのしめ

劇的なものを求めて—演劇と映画のドラマ、その歴史・鑑賞・実際—
 期日 昭和55年7月11日～13日
 △全体講義Ⅴいま演劇とは
 学習院大学教授 岩淵達治氏
 ハゲスト講演Ⅴ
 シェイクスピアの魅力

松下電器産業多摩人事センター
 東京商工会議所
 鹿島建設建築設計本部
 大沢ビルデイングサービス
 日本電気
 日本経営士会
 関戸電機
 日本化薬
 京王プラザホテル
 ランドプリングニーター
 日立スプリング*
 日野市職員組合
 酒類食品流通研究所

【個人利用】
 産業能率大学助教授
 都立大学助教授*
 東京ガス不動産
 県立宇都高校生徒
 日本水産

電気通信大学教授 市川 昌弘
 武蔵大学教授 横山 定雄
 芝浦工業大学教授 高橋 清
 青山学院大学講師 田中 啓史
 立教大学助手 坂本孝治郎
 駒沢大学助教授 森 武磨
 早稲田大学助教授 鴨 武彦
 成蹊大学文化会 米川 伸一
 一橋大学教授 植村 栄治
 成蹊大学助教授 植村 栄治

劇団俳優座演出家 増見利清氏
 △セクションⅤ演習
 A ステニスラフスキー・システム
 とメイエルホルドの演劇論(丹羽文夫氏)
 B われわれの時代に
 つて演劇とは何か(西村博子氏)
 C 演劇と音楽劇との出逢い(寺崎裕則氏)
 D 映画のドラマツルギー(白井佳夫氏)
 E 演劇の歴史を考える(宮下啓三氏)

一橋大学経済学研究会
 青山学院大学助教授 田村 武夫
 東京工業大学助教授 松田 武彦
 青山学院大学講師 高橋 道雄
 東京都立大学助教授 三浦 武
 慶応義塾大学英語会
 法政大学教授 西川大二郎
 東京大学助教授 平野 龍一
 東京都立大学助教授 金子ハルホ
 学習院大学講師 江波戸 昭
 杉野女子大学助教授 田村 皖司
 東京大学助教授* 見田 宗介
 東京学芸大学助教授 高橋 勇悦
 東京大学助教授 六本 佳平
 東京学芸大学講師 池田 義人
 立教大学助教授 野村 浩一
 早稲田大学助教授 新澤 雄一
 早稲田大学助教授 西宮 輝明
 早稲田大学助教授 伊藤 敬一
 横濱国立大学助教授 佐々木弘明
 東京農工大学講師 鉅鹿 健吉
 電気通信大学助教授 狩野 紀昭
 明治大学マーケティング研究会
 明治大学学生保険委員会
 早稲田大学助教授 早川 弘道
 一橋大学消費生活協同組合
 法政大学助教授 小川 孔輔
 青山学院大学講師 佐藤 元洋
 法政大学講師 水野 進一
 青山学院大学助教授 新岡 進一
 東大比較文学・比較文化研究室
 東京都立大学助教授 水沼 知一
 国際基督教大学助教授 三宅 彰
 津田塾大学講師 長岡 亮介
 成蹊大学助教授 広野 良吉
 慶応義塾大学助教授 石坂 巖
 早稲田大学助教授 示村悦二郎
 東京薬科大学助教授 須賀 哲弥
 中央大学助教授* 吉村 二郎
 日本女大新聞記事索引作成研究会
 東京経済大学助教授 中村 貞二
 法政大学助教授 川上 忠雄

早稲田大学助教授 大槻 義彦
 東京経済大学経済政策サークル 望月 清司
 専修大学教授 羽田 三郎
 慶応義塾大学十時敵周研究会
 青山学院大学助教授 二ツ房 保
 専修大学助教授 内田 弘
 早稲田大学助教授 榎田 信男
 千葉大学講師 里村 洋一
 明治学院大学助教授 松島 浄
 上智大学講師 J・フェルナンデス
 成蹊大学教授 田中 一行
 慶応義塾大学助教授 高橋潤二郎
 神奈川大学助教授 橋本 二郎
 立正大学助教授 高橋 偉介
 大阪大学精密工学科 厚東 俊介
 明星大学カウンスリング研究会
 独協大学助教授 宮川 淑
 日本聾話学校
 第108回大学共同セミナー
 第7回国際学生セミナー
 学生年輪の会春の集い
 99回大学共同セミナー同窓会
 建築デザイン研究会
 大学サークル連絡会議
 語学教育振興会
 アルポルタージュ研究会
 ノーリズム研究会
 参画協会「若い森青年の樹研究会」
 赤十字語学奉仕団
 松本亭英語教育研究会
 御茶の水キリストの教会
 久遠キリスト教会学生会
 国際TM協会
 市川きもの学院
 日本聖書学研究所
 多摩地区教官研修会
 文学教育研究者集団
 英語教育協議会
 すみれ幼稚園
 立川スプリング

日本水産 多摩美咲ナショナル電器
 松下電器産業多摩人事センター
 日本電気
 トワールシステイ 東京
 レヴゼン
 日産プリンス多摩販売
 建築設計管理協会
 小西六写真工業
 日本化薬
 第一弘報社
 【個人利用】
 産業能率大学助教授 山田 善靖
 電気通信総合研究所 小林 宏
 東京大学学生 上柳 敏郎
 法政大学総長 中村 哲
 中央大学学生 小川 博
 【日帰り利用】
 東京多摩花王販売
 市川きもの学院

●編集後記
 本紙は54年度の最終号なので、そのフィナーレを飾ったプログラムを出来るだけ詳細にご報告したいというもろみから、はからずも14頁となってしまいました。共同セミナー白書をまとめることによつて、この一年の歩みをふりかえることができました。セミナーを通して八王子の丘で結ばれた諸先生との絆こそ、何にかえがたいハウスの財産であることをしみじみ感じました。前田護郎先生との出会いを、編集子もまた、熱い思いをもってかみしめています。(能)

セミナー・ハウス 第67号
 編集人 飯田 宗一郎
 発行人 岡山 猛
 製作 中央公論事業出版